

SIGNS

地域からの発信

TOWNS & SIGNS

佐賀市

'02鎌倉サイン・シンポジウムを巡って

木彫りの町

井波のミュージアム構想

看板ルネッサンス

「イクスピアリ」のサインデザイン

地下鉄日比谷駅まるとミュージアム

新連載／商業サインの広告学

屋外広告物の標準効果指標「DEC」

街で見つけた色

昭和の青い屋根

SIGN SYSTEM

沖縄県平和祈念資料館

ベルリンのサイン

ポツダム広場とクーダムのタウンサイン

アメリカサイン事情

ポートランドのタウンサイン

小都市の風景

けいはんな学研都市

沖縄県平和祈念資料館

小畑広永
HILOデザイン研究所

新しい「沖縄県平和祈念資料館」は2000年4月の開館である。今年の3月までの来館者は816,000名にもなる。昨年9月11日のテロ以来急激に減少していたが、今年になってから戻りつつあるようだ。

沖縄県平和祈念資料館は沖縄本島最南端の摩文仁の丘にある。ここは一般住民を巻き添えにした地上戦の終焉の地で、悲慘な記憶の残る場所である。一帯が戦跡国定公園で、平和祈念堂と多くの記念碑が立ち並んでいる。

競技設計で優勝したチーム・ドリーム
の代表福村俊治は、「沖縄の将来の夢や



平和を希求する心を建物に表現することをコンセプトにし、この場所では設計者個人による建築的な自己主張は許されない。平和の火を中心とする同心円状に建物を配置し、屋根をセットバックさせながら小さく連なる赤瓦屋根をのせ、前面には礎の休憩場所となる柱廊という雨端空間を配置し沖縄の伝統的空間を取り入れながら控えめで細かな建築表現をする。……」と設計の態度を語っている。サインもまた、これに呼応して資料館を造り上げよう、そしてその有様全体が平和希求のサインであるべきだと考えた。

建築は沖縄の手で、沖縄の総合技術力で造られている。サインも沖縄の文化や沖縄の工芸等の形と技術を表したものにしたいと計画した。その一つとして琉球ガラスとの共同制作、シーサーとの組み合わせ、琉球石灰岩の使用を試みた。サイン以外でも琉球赤瓦の文様、琉球松など沖縄の木材によるベンチ、沖縄の星座を写したエレベーターの扉、沖縄をテーマにした緞帳のデザイン、風土から生まれたホール椅子なども沖縄の表現であり、「平和を形にする」心のデザインである。



左／琉球赤瓦屋根・島棟(大棟)の先端の島面。
(鬼瓦に相当する)
右／軒先の文様入り軒丸瓦と軒平瓦。

- ① 平和の礎(前方)と沖縄県平和祈念資料館。
写真提供：福村俊治。
- ② 館名ひんぷんと玄関を通して平和の火を望む。
- ③ ひんぷんのシーサー。
- ④ 西スロープロのサイン柱とシーサー。



門と玄関口

門と手前の小堀に重ねて館名を印した。門の上部には黒御影石の館名板がきまりとして入っている。手前の方は“ひんぷん”である。ひんぷんは沖縄の屋敷にある悪霊除けの塀のこと。そのひんぷんを平和の火を守るために平和の火と門を結ぶ軸線上に置いた。こう配置しないと、直線移動しか出来ないと云われる悪霊を跳ね返すための除霊効力が出ないのである。そしてひんぷんの中央はガラスで切り取って窓にしてあるが、それはひんぷん越しに門を抜け、平和の火に視線を通すためである。そのガラス面にも館名を低く大きく入れた。ガラスの両側の柱には、シーサーが威厳をもって平和を喰う悪霊を入れまいと睨みを利かせている。漆喰のシーサーの制作は石垣島の森長隆光さん。ひんぷんの石材はこの地に多く出る琉球石灰岩である。湿度100%にもなるここでは、カビで黒くなるが優しい感じの石である。

小玄関が、南面に3ヶ所と西側2階へ



のスロープ口にある。南面の3ヶ所とも平和の火と正対している。ここに館名と案内を兼ねたサイン柱を設けた。柱は琉球石灰岩で正面の表示部分はガラス板である。ガラス面は4ヶ所とも色違いで、赤、紫、緑、灰色で、柱の上のシーサーの色と引き立てあっている。4ヶ所のシーサーは地元糸満の三人の瓦・漆喰職金城清長さん、兄弟の大城正秀さん、大城勲さんの制作である。どれも个性的で沖縄の人の大らかさを感じさせる作風で魅力がある。

沖縄平和記念資料館設立の主旨

門に入って左に正面の玄関がある。その手前左手の壁に曲面でアルコーブを設けた。アルコーブに透明のガラス板を浮かせてある。アルコーブは3連で沖縄を想わせる強い原色を塗装した。色は黄、緑、紫である。一番左手で黄色を背にした「ことば」が、この平和記念資料館設立の主旨である。

この主旨は沖縄の大切な問題であり、慎重に決められたシビアなものである。他の2面は館内の案内と利用案内である。

ホールの誘導サイン

ホールは東西に130メートルと長く、南が中心側の円弧になって緩やかにカーブしている。ホールの南面は吹き抜け一杯のガラス面で、南国らしい陰陽があり、全体では明るく爽やかな感じのする空間である。ホールの北側に殆どの施設が並ぶ。したがって施設への接点は北側にある。その中で大きなポイントは2ヶ所、2階の常設展示室に通じるところと展望塔への接点である。

常設展示室の方には4面ガラスで、中に照明が入って緑色になる。展望塔の方は琉球ガラスの色板で造った沖縄の印象がはめ込まれている。

⑤⑥南小玄関のサイン柱とシーサー。

⑦シーサーを設置する漆喰作業。

⑧設立の主旨と館内案内。

⑨誘導サインと鳩。

(館内・外に飛散する平和の鳩の一部)

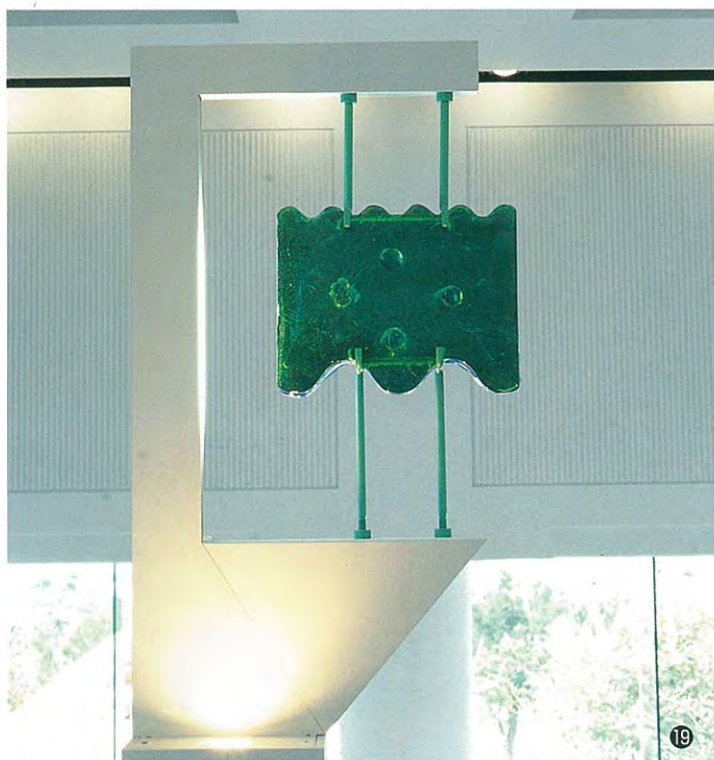
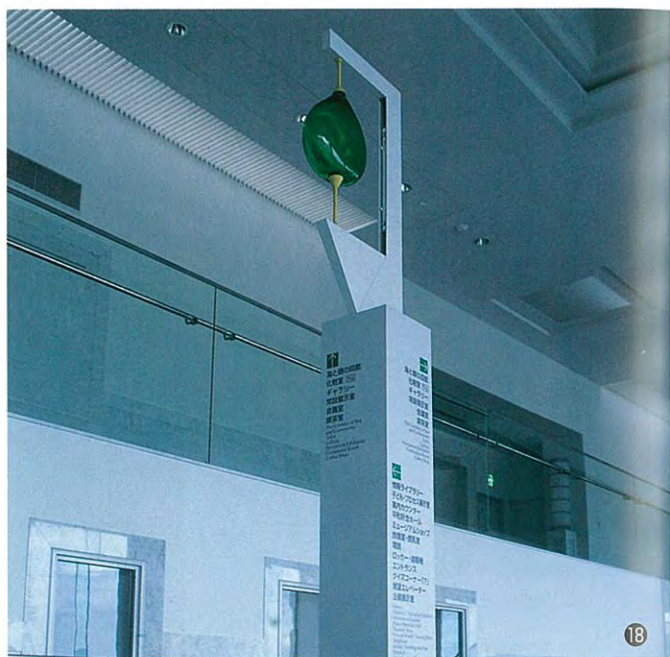
⑩⑪ホール内の誘導サイン。

⑫琉球ガラスによる沖縄の印象一雲。

⑬琉球ガラスによる沖縄の印象一星。

⑭ホール内の館内案内。





- ⑮ホール内のスロープと誘導サイン柱—宙吹ガラス「心臓・血」。
- ⑯誘導サイン柱—宙吹ガラス「沖縄の紅イモ」。
- ⑰誘導サイン柱—宙吹ガラス「沖縄の雲・空」。
- ⑱誘導サイン柱—宙吹ガラス「沖縄の植物」。
- ⑲誘導サイン柱—重ねガラス坂「沖縄の海・波」。
- ⑳ギャラリーの誘導サイン。
- ㉑ホールの沖縄県平和祈念公園の地図。写真提供：福村俊治。
- ㉒平和祈念ホールの緞帳。(沖縄を中心にして南北逆転の地図)
- ㉓ホール内の誘導サインと琉球松のベンチ。

空の暗くなった時には、照明の効果も出て色鮮やかに見える。別に玄関寄りにテーブル型の館内図があるが、この図を見て館の構成を知ろうとする人は外国人ぐらいで、今はスタンプ台を兼ねている。

スロープ・ギャラリーの誘導サイン

ホールと2階をつなぐ長いスロープがある。スロープには階段も並列していて、重いテーマの展示空間からゆっくりと戻れるように意図されている。スロープは2階のギャラリーから見下ろすことが出来、1階のホールからは見上げることも出来るオープン空間である。そのスロープに誘導サイン柱が両端を含めて5本置かれている。中間には情報ライブラリー、子ども・プロセス展示室があるからだ。このサイン柱には琉球ガラスの宙吹の球を掲げた。

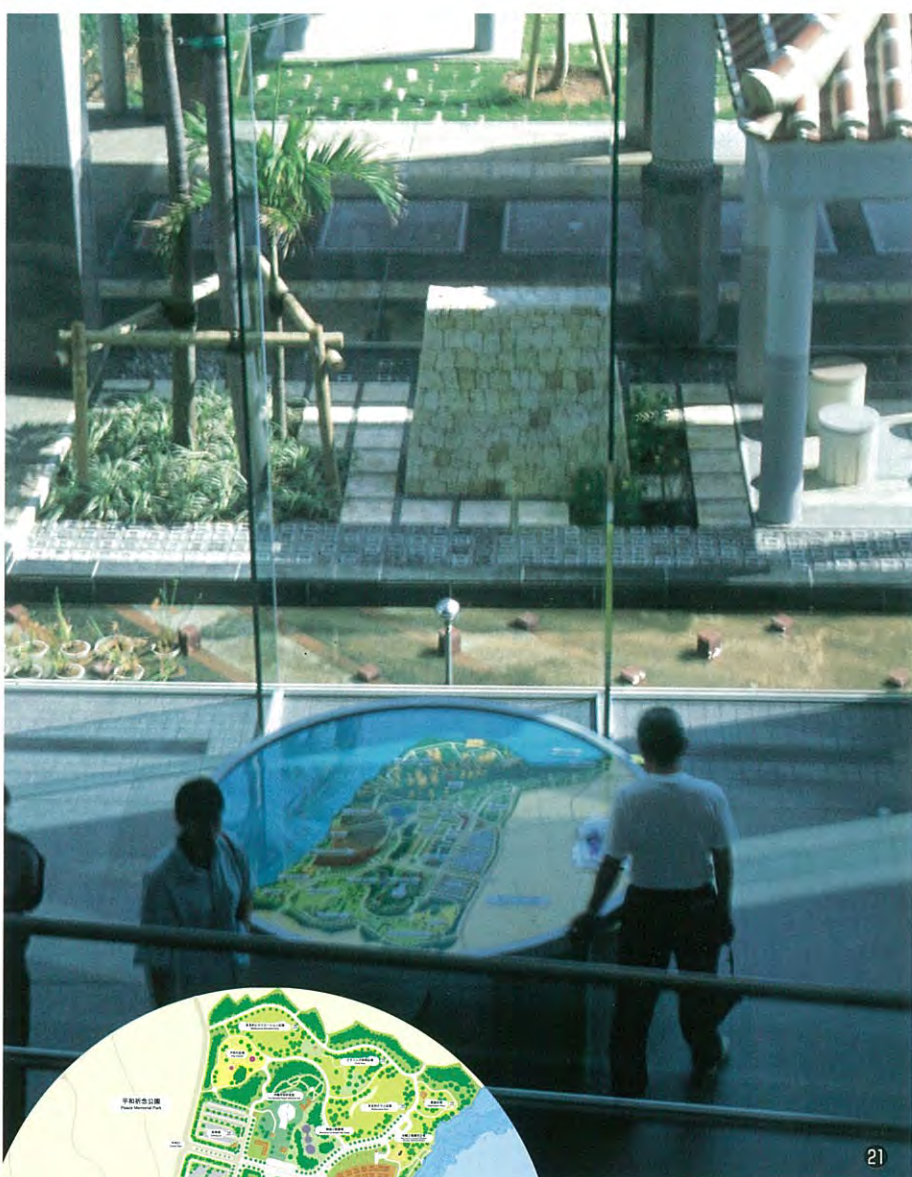
心臓・血は赤色、紅イモは紫色で、沖縄の植物は緑色、雲・空は青色、海・波は緑色と青色(ガラス板の合わせ)である。皆沖縄の魂のつもりである。魂は宝石の様に白いホールに輝いている。

ホールに長く面する2階のギャラリーの2つのポイントに誘導サインがある。ガラスの手摺に合わせた造りで材料も板ガラス、これにも琉球ガラスの「沖縄の形」が入っている。ここの一連の琉球ガラスの仕事は、全て琉球ガラス村の手と技によるものである。

沖縄県平和記念公園の地図

この地図は、糸満の摩文仁周辺を含めて公園全体の図で、この資料館の実際の方位と合わせて配置してある。そして、目前に広がる風景と対応して理解を容易にする、そのために低い丸テーブルにした。また数人で連れ立っての来館者も多い、テーブルを囲んで目を合わせての対話を誘導するためでもある。地図は海と崖、公園、各施設を層状にしてある。

それは、この地のこの地形で起きた過去の悲惨な出来事に少しでも近づき、想いなぞらえることへの手助けをするためである。



大太平洋戦争の舞台の地図

大太平洋戦争の舞台となった場所の地理的關係は、沖縄(戦)を知る上でも重要なことである。また、今後の沖縄を考え創るためにも、日本の中での沖縄の位置、アジアの中での沖縄の位置、大太平洋の中での沖縄の位置を相互に読みとることは大切なことである。

海と礎の回廊は、目前に悲惨な現場と広がる海を眺望することが出来る。ここに大太平洋戦争の舞台、記憶しておくべき場所を示した地図を置いた。これを丸いテーブル形にしたのは、囲んで回りながら、目を合わせて想像の会話が行き交うことを願ってのことである。

展望塔の方位・距離表示

展望塔では、戦争に関係があったところと都市とポイントになる地の方位と距離が示してある。表示は東西南北の窓面の方位に合わせて配置してある。これも想像の手助けではあるが、南の沖縄から見た北南、西東のポイントの量の差、方位の重なりも分かり面白い。

展示室の室名

主要な展示室は2階の常設展示室と1階の子ども・プロセス展示室、情報ライブラリーである。

3つの展示室の室名サインのベースは、沖縄県の海岸線を利用した。

縮尺して、見える限り小さな島まで入れてある。戦争の常設展示室は赤、子どもプロセス展示室は黄、情報ライブラリーは緑である。



24 海と礎の回廊に方位を合わせて置かれた大太平洋戦争の舞台地図。

写真提供：福村俊治。

25 子ども・プロセス展示室の室名サイン。

26 常設展示室の室名サイン。

27 28 可動式の誘導サイン。